

[研究論文] 重大な他害行為を行った対象者への
看護について看護学生が抱くイメージ
- 「医療観察法指定入院医療機関における看護」の講義を
受けた看護学生へのアンケート調査-

寺岡貴子¹・山口善子²・寺岡征太郎³・鳥山哲郎⁴

1 神奈川工科大学看護学部看護学科

2 活水女子大学看護学部看護学科

3 東京医科大学医学部看護学科

4 前長崎県精神医療センター

How do nursing students consider the nursing care for subjects admitted to hospitals
designated by the Medical Treatment and Supervision Act (MTSA)

Takako TERAOKA¹, Yoshiko YAMAGUCHI², Seitaro TERAOKA³, Tetsuro TORIYAMA⁴

Abstract

[AIMS] Nursing students who attended a lecture of “Psychiatric nursing care for subjects admitted to hospitals designated by MTSA” reported how they felt about such nursing care. [METHODS] A self-administered questionnaire survey was conducted after the lecture among nursing students (in the third grade) regarding what they had “realized”, “considered” and “learned” during the 90-minute lecture. This study was approved by Kwassui Women’s University, Nursing Study Ethics Committee. [RESULTS] 32 students responded to the questionnaire (the response rate: 44.4%). 23 subcategories and 10 categories were extracted from the students’ impressions. 10 categories indicated: (1) behaviors associated with psychiatric symptoms, (2) necessity of MTSA, (3) necessity of treatments, (4) nursing care to support the subjects’ lives, (5) change of image to the subjects, (6) collaboration with multi-disciplinary teams, (7) provision of careful nursing care to subjects, (8) anxiety for being harmed, (9) difficulty to cope with, (10) difficulty to support discharge.

Keywords: Medical Treatment and Supervision Act, Nursing student, Nursing Education

1. はじめに

看護師国家試験の精神看護学の出題基準には、「心神喪失の状態で大な他害行為を行なった者の医療及び観察等に関する法律（以下、医療観察法）」が含まれている¹⁾。この医療観察法は、2001年6月に発生した大阪教育大学付属池田小学校での児童殺傷事件²⁾を契機に法制度化の議論が加速し、2005年7月に施行されたものである。心神喪失または心神耗弱の状態、殺人、強盗、放火、傷害などの重大な他害行為を行った者に対して、適切な医療及

びその確保のために必要な観察等の処遇を提供することにより、社会復帰を支援・促進することを目的としている。この法律の目的の達成とシステムの構築には、「司法」「医療」「行政」の三者が医療に関する理念を確認・共有し、それぞれの役割分担と責任範囲を明確にしたうえで医療や看護を行うことが求められている。指定入院医療機関（医療観察法によって入院による手厚い専門的な医療の提供が行われる厚生労働大臣が指定した医療機関）は、平成28年9月1日現在では、全国約32施設が稼働しており³⁾、そこで提供される医療や看護のあり方については、今もな

お議論がなされているところである。一方、先述のとおり医療観察法は看護師国家試験の出題基準にも設定されている⁴⁾ こともあり、医療観察法のもとで展開される医療や看護を看護基礎教育でも扱っていく必要性が、今後高まってくるものと推察される。そこで我々は、試行的ではあるが、医療観察法の目的、対象、処遇の流れに関する一般的な講義に終始せず、実際に医療観察法病棟で勤務する看護師の協力を得て、重大な他害行為を行った対象者への看護の実際を看護学生に伝える講義を行っている。これは、臨床看護師と教員とが協働して行う講義・演習であり、受講する学生の興味や関心を刺激し、医療観察法に対する理解を促進するという効果も期待できると考えている。白石 (2013) も看護実習生を対象に、医療観察法に対する知識及び関心の変化と学びについて調査しているが、講義後に知識・関心ともに上昇したことを示している。そこで、本研究では、精神看護学が担当する科目において「医療観察法指定入院医療機関における看護」をテーマとする講義を受けた看護学生が、重大な他害行為を行った対象者への看護についてどのようなイメージを抱いたのかを明らかにすることを目的とする。

2. 用語の定義

医療観察法：厚生労働省⁶⁾ の心神喪失等医療観察法の概要を基に「心神喪失等の状態で重大な他害行為を行った者の医療及び観察等に関する法律であり、心神喪失又は心神耗弱の状態で、重大な他害行為を行った人に対して、適切な医療を提供し、社会復帰を促進することを目的とした制度」とする。

医療観察法病棟へ入院処遇となる対象者：厚生労働省⁷⁾ の心神喪失等医療観察法の概要を基に「心神喪失又は心神耗弱の状態で、重大な他害行為（殺人、放火、強盗、強姦、強制わいせつ、傷害）を行った人に対して、医療観察法による医療及び観察を受けることが必要と認められた者」とする。

3. 方法

3.1. 研究デザイン

質的帰納的研究デザイン

3.2. 研究対象

A 看護大学において、精神看護学（専門科目）の講義テーマ「医療観察法指定入院医療機関における看護」の講義を受講した看護学生（3 年生）のうち、研究参加の意思を有する者とした（以下、学生）。

3.3. 調査方法

90 分間の「医療観察法指定入院医療機関における看護」の講義終了時に、学生自身の「気づき」「考え」「学び」などに関する自己記入式のアンケート調査（A4 用紙 1 枚）を実施した。回収方法は留め置き式とし、回収ボックスは学生が自由に投函しやすい場所として事務室に設置した。なお、回収ボックスは 2 週間後に回収した。調査期間は 2012 年 6 月～7 月であった。

3.4. 分析方法

自己記入式アンケート調査の自由記載内容を逐語録に起こし、学生が抱くイメージに関連する部分を抽出した。それらをコード化し、意味内容によって分類したものをサブカテゴリとし、これらの関連性を比較検討し、カテゴリ化した。分析過程では精神看護を専門とする実践家および研究者と協議を重ね、解釈に飛躍がないかをお互いに確認し合った。

3.5. 倫理的配慮

本研究は活水女子大学の研究倫理審査委員会の承認（倫理審査承認番号 1037）を得て実施した。学生には、自由意思の確保、研究参加の拒否・撤回ができること、その際、学習上の不利益は被らないこと、個人情報保護の厳守、結果の公表方法、研究目的以外にデータは使用しないことなどを文書と口頭で説明した。アンケート用紙は、研究者である教員の目にふれない場所（事務室）に回収ボックスを設置した。特に、研究同意の有無が単位認定評価に影響しないことを説明し、アンケートの開封は単位認定評価の後に行った。

4. 結果

アンケートは講義受講者 72 名中 32 名より回収した（回収率 44.4%）。自由記載より、重大な他害行為を行った対象者への看護、または医療観察法指定入院医療機関における看護に関するイメージについて、23 のサブカテゴリ、10 のカテゴリを抽出した（表 1）。以下、カテゴリを【 】, サブカテゴリ [], 記述内容を「 」内に下線で示す。

学生は、【医療観察法の必要性】を理解するプロセスで、【精神症状に伴う対象行為】が存在することに気付く。実際に対象者の生活状況を知ることで【治療の必要性】を実感し、【対象者の生活を支える看護】が重要であると捉えていた。また、【被害を受ける不安】や【対応の難しさ】、【退院支援の難しさ】を感じながらも、【多職種チームの連携】や【対象者への手厚い看護】が当該病棟では重要な側面をもつと捉えていた。それによって、【対象者に対するイメージの変容】が起こっていた。

4.1. 【医療観察法の必要性】

このカテゴリには、医療観察法や対象者の処遇に関する学生の理解と医療観察法の必要性が含まれており、[法律の理解の必要性] [入院対象の特定化] [病棟の機能分化] [早期の社会復帰の促進]の4つサブカテゴリで構成されている。

具体的記述内容としては、学生は、「医療観察法病棟では、法律と密接に関係しているということがわかった。看護師になっていくには、法律やその制度についても理解を深めなければならない。」ということや、「医療観察法病棟に入院している人は対象行為を起こして入院していて、疾患が特定されているのがわかった。全国にも入院できる病院が特定されていることがわかった。」などがあつた。また、学生は、「(医療観察法病棟内の機能分化として) 急性期、回復期、社会復帰期でそれぞれの時期で看護が違っていることがわかった。」「早期の社会復帰を目指しているの
で対象者にとっても早く社会に戻ることはとても良いことと思った。」などの記述があり、医療観察法の機能や役割、その必要性に関する内容が含まれていた。

4.2. 【精神症状を伴う対象行為】

このカテゴリには、重大な他害行為を行った対象者の背景にある精神症状への理解を深め、対象行為が単なる犯罪ではなく、精神症状に由来したものであることへの理解が含まれている。[症状による対象行為の理解] [症状の改善による対象行為の安定]の2つのサブカテゴリで構成されている。

具体的記述内容は、「精神症状によって対象行為を起こしてしまうことがわかった。殺人や放火などを起こしてしまうこともあるのがわかった。」や、「症状が治れば穏やかになるんだ、よくなるのかと思いました。」などがあつた。

4.3. 【治療の必要性】

このカテゴリは、学生が対象者自身が薬物療法の必要性を理解し、治療を持続することで、日常生活を送ることが可能となることへの気づきが含まれており、[薬の理解の必要性] [治療により日常生活が可能] の2つのサブカテゴリで構成されている。

具体的記述内容は、「薬の必要性を自分で理解してもらうことが必要ということ。」や、「本人が継続して薬を飲んでいくことが大切で、継続してきちんと治療をしていけば普通の生活が遅れる。」などであつた。

表 1. 重大な他害行為を行った対象者への看護について
看護学生が抱くイメージ

| カテゴリ | サブカテゴリ |
|--------------------|--------------------|
| 医療観察法の必要性 | 法律の理解の必要性 |
| | 入院対象の特定化 |
| | 病棟の機能分化 |
| | 早期の社会復帰の促進 |
| 精神症状に伴う 対象行為 | 症状による対象行為の理解 |
| | 症状の改善による対象行為の安定 |
| 治療の必要性 | 薬の理解の必要性 |
| | 治療により日常生活が可能 |
| 対象者の生活を 支える看護 | 病気の部分にとらわれない看護の大切さ |
| | 自己決定を支援する関わり |
| | 再発予防に向けた関わり |
| 被害を受ける不安 | 被害を受けないか心配 |
| | 犯罪の怖さ |
| 対応の難しさ | 行動の予測の難しさ |
| | 対応の困難さ |
| 退院支援の難しさ | 再発予防の困難さ |
| | 周囲から受け入れの難しさ |
| 多職種チームの連携 | 多職種チームの関わり |
| | 多職種チームの中での看護師の役割 |
| 対象者への 手厚い看護 | 看護師の関わりで安定する |
| | 手厚い看護による対象者の変化 |
| 対象者に対する イメージの変容 | 怖いイメージの変化 |
| | 対象者の見方の変化 |

4.4. 【対象者の生活を支える看護】

このカテゴリは、看護師が対象者に対して根気強く関わり、対象者自身の自己決定を支えるプロセスにおいて、対象者の生活全体を見渡しながらか看護を提供しようとしていることが含まれる。[病気の部分にとらわれない看護の大切さ] [自己決定を支援する関わり] [再発予防に向けた関わり] の3つのサブカテゴリで構成されている。

具体的な記述内容としては、「病気と思って何でもやってあげるのではなく、対象者の自己決定を支えることが必要。」や、「自分で気づくまで待ち、気づかないときに声をかければよい。過度なケアはその人のセルフケアを落としてしまうと思った。」ということや、「他人に決められるよりも自分で決定する。何でも支援するのではなく、見守りも必要。警戒することなく、対象者が日常生活を送っていけるためにどうすればいいか共に考える姿勢を大切に
する。」などであつた。また「何度も同じことを繰り返さないような関わりが必要だと思いました。」といった記述

があった。

4.5. 【被害を受ける不安】

このカテゴリは、対象行為となる他害行為の深刻さに圧倒され、関わりをもつ中で看護師自身にも危害が加わるのではないかといった不安を抱くことが含まれる。[被害を受けないか心配][犯罪の怖さ]の2つサブカテゴリで構成されている。

具体的記述内容は、「急に治療効果が出なくなってしまった時などに被害を受けないか少し心配という点がある。」や、「犯罪を起こした人があるのは怖いと思った。」などであった。

4.6. 【対応の難しさ】

このカテゴリは、医療観察法病棟で働く自分をイメージし、対象者の思いをくみ取ろうと努力するものの関わりでの難しさを否めないという内容が含まれる。[行動の予測の難しさ][対応の困難さ]の2つサブカテゴリで構成されている。

具体的記述内容は、学生は、「重大な他害行為を行ったとして、気持ちの面で自分のことをどう思っているのかよくわからないので、対応の仕方が難しそうだった。」また、「どのような心理状態で接すればいいのか、どんな対応をすればいいのか、難しそう。」などであった。

4.7. 【退院支援の難しさ】

このカテゴリは、社会復帰を目指している対象者への関心を高める一方で、病気を繰り返すことや具体的な対象者の受け入れ態勢が整備されない状況に関する困難感が含まれる。[再発予防の困難さ][周囲からの受け入れの難しさ]の2つサブカテゴリで構成されている。

具体的記述内容は、学生は、「同じようなことを繰り返す人が多いみたいなので繰り返させないようにしていくのが難しいと思った。」や、「家族など、周りの人が大変な思いをしているので、なかなか家に帰ることは難しそう。」というものである。

4.8. 【多職種チームの連携】

このカテゴリは、多職種チーム全体で対象者の状態を共有し、連携・協働しながら対象者への医療や看護を提供していることへの理解が含まれ、[多職種チームの関わり][多職種チームの中での看護師の役割]の2つのサブカテゴリで構成されている。

具体的な記述内容としては、「多職種チームで関わっており、対象者の状態が把握しやすいと思う。専門職として協力して取り組むことが大切。」ということや「チームの中で、看護師は医師の指示を待つのではなく、看護師としての意見を持つこと、それを示すことが大切。」などであった。

4.9. 【対象者への手厚い看護】

このカテゴリは、看護の力によって対象者の病状や環境が変化していくことを知るとともに、そこには手厚い看護が存在することを理解するといった内容を含む。[看護師の関わりで安定する][手厚い看護による対象者の変化]の2つサブカテゴリで構成されている。

具体的記述内容は、学生は、「看護によってその人の状況が変わっていくんだなと思った。」ことや、「心神喪失等の状態も、手厚い看護によって対象者も安定するのだと思った。」というものであった。

4.10. 【対象者に対するイメージの変容】

このカテゴリは、対象者が犯した重大な他害行為に関するイメージが、実際に看護を行っている臨床看護師の語りを聞くうちに柔和なイメージに変容していく過程を含む。[怖いイメージの変化][対象者の見方の変化]の2つサブカテゴリで構成されている。

具体的記述内容は、「怖いイメージがあったけど、穏やかな人が多いというのが印象的でした。」や、「偏見をもっていたけれども、普通の1人の人としてみていくことが必要。」などであった。

5 考察

学生は、入院している対象者の精神症状が改善することによって、他害行為が落ち着き、対象者が周囲の力を借りながら社会復帰を実現していくという現実を知り、【対象者への手厚い看護】がなぜ必要なのかを考える一方で、そこで働く看護師の安全にも関心を示していた。特に、いくら精神的に安定したとしても衝動行為や想定外の行動化の可能性が否めないという事例の存在を知り、看護師自身も【被害を受ける不安】を抱いているのではないかと感じているようだった。当該病棟においては、医療者の安全面に対する配慮が細やかに施されているのだが、この配慮は学生にとってはイメージが難しいためか、【対応の難しさ】や【退院支援の難しさ】という対象者への看護に対する困難なイメージが前面に描かれていたものと推察される。実際に対象者に接している看護師を対象とした調査においても、「怖い」「危険である」などのネガティブなイメージ

を抱くことが報告されており、とくに重大な他害行為を行った対象者に接する看護経験が少ない者にその傾向が強いと言われている⁸⁾。医療観察法入院処遇終了後の対象者を受け入れる社会復帰施設の職員の思いに関する調査では、施設の職員が、対象者を受け入れることへの不安や対象行為の再発の恐れを抱いていることと、それに対する医療機関からの支援として、対象者への対応に関する相談や医療観察法に関する学習の機会が必要であることを報告している⁹⁾。対象者に対する具体的な対応方法を知ることや医療観察法に関する理解が促進されることは、対象者との関わりにおける過度な不安や困難感の低減に役立つものと考えられるが、講義を受講した学生のイメージの変容もこれと似ており、手厚い看護によって対象者の症状の安定化が図られ、日常生活が取り戻せるといったイメージの構築に貢献しているのではないかと考えられる。

また、【対象者の生活を支える看護】として、学生は【自己決定を支える関わり】の必要性を感じ取っていた。認知や思考の障害をもつ対象者の多くは、セルフケアを行うための自己決定能力が低く、多くの支援を必要としている。これは対象者に限ったことではなく、精神障害をもつ人への看護支援として共通の視点ではあるが、適切なセルフケア支援は精神科看護師の責務でもある。重大な他害行為、その行為の深刻さに戸惑うこともあるが、それによる対象理解の偏りは回避しなければならない。個人情報保護の観点からも、学生が臨地実習で当該病棟を訪れる機会は少なく、実際の看護を経験することはないかもしれないが、だからこそ、学生が他害行為の内容や犯罪のイメージだけで対象者を受けとめ、偏った対象理解だけが先走ることがないように、対象者がおかれている環境や状況、そこで必要とされている医療・看護の実践を学習する機会が重要ではないだろうか。

6 結論

6.1

「医療観察法指定入院医療機関における看護」の講義を受けた看護学生が、重大な他害行為を行った対象者への看護について抱いたイメージとして抽出した10のカテゴリは以下の通りである。【医療観察法の必要性】【精神症状に伴う対象行為】【治療の必要性】【対象者の生活を支える看護】【被害を受ける不安】【対応の難しさ】【退院支援の難しさ】【多職種チームの連携】【対象者への手厚い看護】【対象者に対するイメージの変容】

6.2

学生が、犯罪のイメージだけで対象者を理解するのではなく、「医療観察法」の目的を正しく理解し、対象者の社会復帰を支援・促進することの必要性を学べるような教育プ

ログラムの整備が喫緊の課題である。

引用文献

- [1] 厚生労働省：平成22年版保健師助産師看護師国家試験出題基準について、
<http://www.mhlw.go.jp/topics/2009/04/tp0413-1.html> (最終検索日 2016-12-26)
- [2] 国立大学法人大阪教育大学：事件の概要、
<http://osaka-kyoiku.ac.jp/safety/fuzoku/ikd/goui/jikengaiyo.html>. (最終検索日 2016-12-26)
- [3] 厚生労働省：心神喪失等医療観察法の医療機関等の状況、
http://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/hukushi_kaigo/shougaishahukushi/sinsin/, (2016). (最終検索日 2016-12-26)
- [4] [1] 再掲.
- [5] 白石美由紀, 有馬美乃里, 高橋祐子：医療観察法講義における看護実習生の学び アンケート調査からみえるもの, 神奈川県立精神医療センター研究紀要, 17, 66-69, (2013).
- [6] 厚生労働省：心神喪失等医療観察法の概要,
http://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/hukushi_kaigo/shougaishahukushi/sinsin/, (2016). (最終検索日 2016-12-26)
- [7] [6] 再掲.
- [8] 宮城純子, 渡辺純子, 中谷陽二：触法精神障害者に対する看護師のイメージ, 北里看護学誌, 11(1), 10-14, (2009).
- [9] 朝長輝久, 松尾洋一：医療観察法入院処遇終了後の対象者を受け入れる社会復帰施設の職員の思いと病院からの支援の様相, 日本精神科看護学術集会誌 56(2), 291-295, (2013).